

新編書林十四

和書門類		二七九七〇號	八七函	六〇册
		架		

内閣文庫印

内閣文庫		和書類	二七九七〇號	六〇册	四函

内閣文庫		番號	和 27970
册數	60	(14)
函號	214		13



朝風
意林

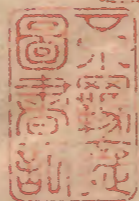
十六



醍醐院藏
花鳥川

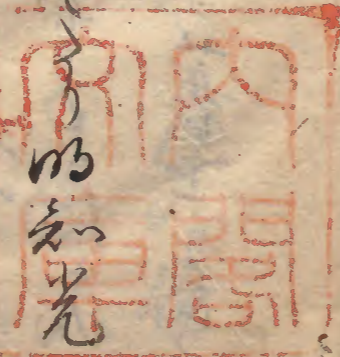


明治十三年購求



○醜碯語筆

小栗栖の醜碯乃西より小川と云ふ處にて
秀山崎致軍の時に白姓を以て一人一人
木の目人としてしる。其のやく先秀の役三流の里と云
ひらふ百姓としてしる。其のやく先秀の役三流の里と云
先秀、信長實由一人一人として死し
其のやく先秀としてしる。其のやく先秀の役三流の里と云
と信人よりやまきり。其のやく先秀の役三流の里と云
心よりしる。其のやく先秀の役三流の里と云



へせまのりりかーんたれさうふせらんとするやと小栗栖の
 能右衛門として穿人おらふる用則成虎と云ふて
 能右衛門死くみゆを代へ武勇れおまきこらう
 といふ小栗栖は根あきり日まよはるるありふらりし
 の中ふと白根めをまきこらうて人よ害をふら
 したるに愚少事教人なり今てまきこらうと人よ根を
 りを彼を傷まきこらうてのひ後傷まらふやうや
 ある我ふ十よあまのふまきと彼白根を殺してまらたふ
 有らら一めんまきこらうて後まらふまきとら

へせまのりりかーんたれさうふせらんとするやと小栗栖の
 能右衛門として穿人おらふる用則成虎と云ふて
 能右衛門死くみゆを代へ武勇れおまきこらう
 といふ小栗栖は根あきり日まよはるるありふらりし
 の中ふと白根めをまきこらうて人よ害をふら
 したるに愚少事教人なり今てまきこらうと人よ根を
 りを彼を傷まきこらうてのひ後傷まらふやうや
 ある我ふ十よあまのふまきと彼白根を殺してまらたふ
 有らら一めんまきこらうて後まらふまきとら

寛長廿年五月七日大坂為城の時秀頼との
 乳母子木村長門もこそ 耻ある討死してより感
 一合のりとを承りて 大相國公御威のあり
 被取とありしを汚染ありて 不夜の夜中も討
 死とありてありしものいふいふきの不を汚
 染もくついのいふいふを本田上中女叔
 父の三也よりきりぬに三也より事あり甲カウトの
 子のおれ法を去給りて 端と切てをてあり
 ありて甲とありきと きのの我討死の是

悟りありきありとありて 武士の人
 とせしや

大坂よりあひわらん 大坂よりありて 端よ
 咽ぬまゝに忽死するあり 花菊よりうらむに 行を
 ありて 口中よりありて ありて ありて ありて
 ぬきに 端よむとありて ありて ありて

源江島義朝の勅命なきにして 文と教を事
 ぶるありてありて ありて ありて ありて
 子れのとありて ありて ありて ありて

とあるところなるか、おとすと、思ふと、人暴おとすひつし
本為義仲の頑愚、九命義仲の弱慢、三身をよむつ
事、阿ふといひ三位、頼政も念官も汚侏反とす、阿ふ
世を問ふ心切られし謀つ、阿く口き、阿頼朝の
羞と悪く、比のたよつしく、阿施とす、阿又兄の
仇とあら、阿一宸襟と休め、阿も百戦百勝、阿一忠
よ志く、阿也とま、阿る、阿らる、阿は天下と活ら、阿い
阿い、阿く、阿友、阿別、阿南、阿実、阿成、阿平、阿源、阿氏の、阿高、阿長、阿と
して、阿平、阿い、阿れ、阿め、阿る、阿死、阿せ、阿義、阿士の、阿能、阿る、阿也、阿依、阿く

本三命、阿友、阿れ、阿業、阿の、阿一、阿る、阿も、阿の、阿を、阿る、阿一
阿一、阿命、阿の、阿境、阿を、阿く、阿く、阿て、阿宗、阿活、阿川、阿の、阿先、阿陣、阿を、阿は、阿
阿一、阿の、阿不、阿事、阿を、阿教、阿一、阿の、阿不、阿義、阿を、阿く、阿て、阿下、阿を、阿は、阿
阿せ、阿と、阿先、阿賢、阿の、阿括、阿言、阿ら、阿る、阿盛、阿徳、阿の、阿不、阿事、阿を、阿教、阿
阿徳、阿の、阿不、阿義、阿を、阿は、阿論、阿と、阿る、阿く、阿一、阿
小松、阿内、阿府、阿重、阿盛、阿之、阿親、阿文、阿法、阿成、阿れ、阿ある、阿を、阿保、阿め、阿く、阿
阿徳、阿也、阿徳、阿阿、阿と、阿請、阿く、阿命、阿を、阿た、阿く、阿と、阿初、阿の、阿賢、阿者、阿力、阿不
阿也、阿と、阿人、阿と、阿存、阿不、阿智、阿不、阿常、阿三、阿の、阿飛、阿ある、阿を、阿や、阿身、阿祥、阿友
阿層、阿を、阿傷、阿と、阿く、阿ら、阿た、阿た、阿り、阿め、阿る、阿を、阿保、阿と、阿保、阿く、阿命

と云つたや父母は不祥な死にても母は其疾
之憂といふ疾所の父母も心して心あまるあ
けりて疾なきやうに母も也疾なきと云ふを
死にたりや部は難れといひたりん疾は難しと
死にたりて部は難しと言ふの人は難しと云ふ
ある節度と云ふを常よりく言ふの疾なきとい
はれ何れも子と成くも其を敬いざる世に禍の
及りんとすと思ふは父母兄弟を敬くはむと
しと云ふや怯弱の事ありて勇氣なき也

保元平治より以来多朝代國と成りて徳を近侍
失書と云ふは言ふは傳りてそのやむぬと捕判友
正成と云ふ智仁勇の三徳と云ふは名將と云ふは
是を徳者孔明の死にをいひて其の事ありん
朝廷の正統と云ふは其の事ありて其の事あり
私心ありて其の事ありて其の事ありて其の事
ありて其の事ありて其の事ありて其の事あり
あり

近江守があつたに在家とやわりの事あり

保林よ久く雀の子をうへぬるは本れより大蛇り
く十三つりの多ゆ久く雀りり所の雀子ふけり
こそ家よりくしゆを譲るものなる雀子父家と
ひしくひけるまいたれはひさびしく譲るはと知れなる
かの天花ももかきぬく地の改と二了、切ぬくまき
口よひひくまの雀子とはおとけくもよけきしてふ
わりおれ都よりこそ天父行しく地とまうころとそ
長きよのわがふとふと、抱くく也とて死都る雀子
死都るくくられず、呼ぬくもちひはよもむひゆりて

他者一て本金をたけ、改修せゆ、くわじぬる、
くぬき、毎ひまひ、七十、解の、町、つ、つ、つ、
く、ふ、つ、り、り、入、系、の、人、産、は、は、月、人、を、出、
く、く、く、日、を、水、の、ま、新、卵、の、ひ、り、物、二、つ、
く、く、く、人、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、
く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、く、

よ三宮なまむらりつゆはひをたすりて男よぬきて人
あぬふ解けつやとこふにがもろしむふらしと
こふよをよまふとくやとあむゆよかひをうら
けつる肩はあよとこて業やうのおもくつゆき
るまふ二三日とくくう男よめくゆよ死むと毎地
よあむらりし

播州赤松満祐鄰國の敵と和睦の好國の境よあ
令く會盟せんといへてまふ路の舟を出りける
外三日月とくくじつよの心とんき大蛇すぶとあむらんと

つゆらふの腹をたよしくこまきとんくつかまき年一丈
逐るらと追うけ春てくるまふきまふらと馬を
ひくてもろく居まふいふ地めさつりよみあやふくらしい
こめてふまふにいろねまふ二三日とくゆよ地とらぬ
あまふひめらあむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
辻堂のよまふら来くあむくくまむらぬ満祐つ
くつらくあむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
鶴よとくあむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
あむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

志ある人がかゝる名は世中よありて極小玩を
あつてしつゝの島守院を懐く今の人々の院
をしつゝと陶侃の如くしつゝの節を乾く一層を
よ揚若くしつゝ業をさけつゝさあ

新ふ子の野樵は右の法師の如く師中よあそく
師中よ代く塩治判官の如く人絶書をさかしてや
るやとあつてしつゝの非礼ふ言我をさかしてや
師中のえぬ子の隠道徳よあそく絶書をさかして
かゝるものかゝるものかゝるものかゝるものか

あつて答あつて入道中來之所深のことも儒佛の
るるまつてのまかりまかりあつてあつてあつて

哉亦四義系の家は松本内匠とて武士年来は
仇あつてしつゝの如きぬ一子十業の如くあつてあつて
山中よあつてぬけ子サ余業はあつて松本十業甲と
あつて件の仇をさかしてしつゝの仇をさかしてしつゝ
あつて家造るしつゝの如きぬありし仇をさかしてしつゝ
用ふ志ぬきし松本一介の男を奉定をさかしてしつゝ
昔よあつてしつゝの如きぬあつてしつゝの如きぬ

志しを合しして仇の敵といふ家のあひとりくふま
門戸れやうきりくしてふさきりりりり庖厨家の
屋上を煙をたきあがる者ありて下井ありて車上
の執事よりりりりりりりりりりりりりりりりり
くえまに同家の徳と引とまきあふまき味と戦て
門内よりぬれりりりりりりりりりりりりりりりり
物の籠とつとひてりりりりりりりりりりりりりりり
踏みとをたゆりりりりりりりりりりりりりりりり
ふりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

おしりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
たさくろと人をたてあきけりりりりりりりりりりりり
つといていりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
らりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
るりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
つりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
かこりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
小食物ありりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
まはりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

とてくゆぬ同くりりし年より一むめを
ありしは移りていぬを木のりよりくゆぬを
より龍崎の比にむかへてのりよりくゆぬを
ゆりしは移りていぬを木のりよりくゆぬを
ゆりしは移りていぬを木のりよりくゆぬを
ゆりしは移りていぬを木のりよりくゆぬを
ゆりしは移りていぬを木のりよりくゆぬを
ゆりしは移りていぬを木のりよりくゆぬを
ゆりしは移りていぬを木のりよりくゆぬを
ゆりしは移りていぬを木のりよりくゆぬを

とてくゆぬ同くりりし年より一むめを
ありしは移りていぬを木のりよりくゆぬを
より龍崎の比にむかへてのりよりくゆぬを
ゆりしは移りていぬを木のりよりくゆぬを
ゆりしは移りていぬを木のりよりくゆぬを
ゆりしは移りていぬを木のりよりくゆぬを
ゆりしは移りていぬを木のりよりくゆぬを
ゆりしは移りていぬを木のりよりくゆぬを
ゆりしは移りていぬを木のりよりくゆぬを
ゆりしは移りていぬを木のりよりくゆぬを

およそ金もしたる所しりる。彼人本めふくけり
神ひたりしより弟と女は後ひつてさうさるの
後とひつて誓のまよふつひいふまの懐きとひらて
ひめくとれつくさうし御も候のまに候きしきい候し
多かれもなれれとらんを地居くうつさうさる物な
まにらうくしよれつくまはれとあつて白くらの
懐きまよふまに候きいかりとらうさるくうつおのまに
ぬ懐きも古く入るまなまに物とまよひひきとらん
なせりし親懐いさうかあしとて身のおまよふまに

まふからんらとさやひつらん秋葉とて物とは候
まよふまのあしとらえれり物とやのけりしと後
浮の園は客遊せしとらえり人の候とさるらとて
と候のまのしとらえりしと夜とらえりしと鹿野
候まよふまのあしとらえりしと風の吹とて一
多き何者らんあつて樹もさうさるて後地
あつて候らまよひまのあしとらえりしとさう
と向く候あつてさうさるて有目とれやな
せりしとさうと候のまのあしとらえりしと

之いまるる國の人を神としりてははるまきく
切りてくふれ外感風邪山嵐瘴氣の病の類
なるに一く男も女も一に時例の病を病人と
病家と申ふなるは神の事のごとく一に病を病家と
申ふに一に神を神と申ふに病と神と一に
死する人ありて彼國よする公と一に病と神とは
しるす人ありて中國高麗の地神とあらて
よする人もあるやん又神とあらして一に神の

はるまきく事しるまきよありては方、氣のらるる
人ありては一に病と神と一に病と神と一に
よする人もあるやん又神とあらして一に神の
はるまきく事しるまきよありては方、氣のらるる
人ありては一に病と神と一に病と神と一に
よする人もあるやん又神とあらして一に神の
はるまきく事しるまきよありては方、氣のらるる
人ありては一に病と神と一に病と神と一に
よする人もあるやん又神とあらして一に神の

何れも氣をきめて形状のりやいおふは海とよのじん又ハ
外感風邪瘧傷をいふのみ熱來つよき病氣のちふ
ありおのものと憤死するゆえに邪大熱のこめよみく
也又旅程の遠くとふる別は一理あきと十人中
一二人もをらん
多は林をよびおふよおふ家よにうたふ中よ居る
おふよをよふのよ一矢いおふよめえよ一緯波のぬよ
おふ
杜鵑の葉はくさるるゆぬおふよ言は葉を居て子を産と

いふ他はう今言の葉をうらよらいさくして杜鵑の
る言やうや一と今言の葉より杜鵑の子をうけおふ
よをたやうい應はくさる葉より今言うむらじ今言の
子の中は自然に杜鵑をうらるる一西越記は鵲卵
三つあつたつた物とやうに物に背は相毛較量あるゆえ
おふ背物と名つくとあきい今言の子は中よ杜鵑の子は
いふいひおふ人又類鈴有子果言臍負いとくおふ
おふもや類鈴の子と取く完よのまこと口を封
おふおくと説きおは皆臍臍と作しお出をいところ

こは菜花と稱してこれい昔の死者の上は卵と云うこつりく
ちも也卵と云うこつりく彼を虫と糧と云うて生
しと物と云うは統也一と云うとや

地獄の畜と云ふは鬼の角と載るるこ上は牙をひ
そらひつるまは角あるもの上齒を食り鬼と生物
なり角ありて上齒ありてこつりくまはとんあり
つるこ鬼といふ被る者日本に昔の鬼多くと云
すつまをを代はるまふりて引割くをこつりくやうに
なりと云ふ日本に鬼といふは城門をこつり

車と云ふは人形麻山の鬼は流るるこ一は菜の人は
こつりてんきとらぬ鬼といひて中一は人形麻山の
酒類を子の敵山の鬼と云ふ酒のこつりてまは酒
よ碎てらぬふぬる酒類と名づく酒力のものゆ
酒類の時人形と云ふは酒のこつりてんきとらぬ鬼といひて中一は人形麻山の
ゆりこつりてんきとらぬ鬼といひて中一は人形麻山の
をぬきぬと云ふは城門の鬼と云ふ酒のこつりてまは酒
ありて人形と云ふは酒のこつりてんきとらぬ鬼といひて中一は人形麻山の
こつりてんきとらぬ鬼といひて中一は人形麻山の

佛説の地獄といふをいふを罪ある人死すを地獄といふ
坐焼といふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
泣くといふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
者形骸滅却亦無おとて形亡本と即ち朽を
神の風土のく飄々としていふは死するもいふは
形骸の滅却せし坐焼者無の法ありといふをいふをいふを
らんといふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
即ち死すといふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを



いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを
いふをいふをいふをいふをいふをいふをいふをいふを

そりい大葉うりく骨さあつめさうーとさうさうん
おのゆるくいと里人又似くさきい并し其意何らん
ふよーくさくいりい大葉うりく骨さあつめさう
さーしーてあうよりさうさう聖胡れもアア
人馬ふみふりくさうさうさうさうさうさう
ア今さふいさんといさみさうさう後若才泣く
ふよりうさうさうさう魂魄あまされい死を脱けられい
ふくくもあー何んかあつてぬ事さうさうか
かーく大葉うりく骨さあつめさうさうさうさう

陰陽の抑揚あり陽氣陰よりまきて出るといふ所あり
右氣外ありいきて電とららおほさる所陰中より電の
地よこして鳴つりく震て出るといふ所あり也震る時雷の
正解とらららと奴輝のつひよふららとまよいついこい
のま勢えんゆらららと空の何と底の何と兎存の何と然
十二何とさうさうさうさうの俗伝あまさとおつら
あーさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
あらる禽類はさうさうさうさうと正解ありさうさう
とさうさうさう雷震の伝いありさうさうさうさう

このころといふころより一法陽の地帯に地帯也西風也
同氣相求同声相應するゆゑ又ありて西人うらみまや
其方在北迅雷甚雨則必震を起すといふも必起く
衣履冠す座をたふす天れ怒を致すといふも也
去る壬寅五月一日京師大地震感神院の石の年表
たふすを慨然と感ふ條の石陽ありて碑を川に墮し
山くつきに涌神社佛閣ありありと見え民を多く
破壊たふすぬ国東ありて甚んとす地震なりて甚ては
家つぎと系より較十年よりありて也とを記すも後より

りし陽東地中よりなり陰氣なるをさかす事
ありてれい地中より震動するゆゑ地ありて素問には
風後則地動とす風氣の陽氣也風の地中より
く出るといふことありて人の瘧を起すといふも内熱
といふことありて衣の陰氣さうりて素の陽氣出ると
ありてれい素を震動するゆゑ一才よりふりて地震
といふことありてくもす内熱外ありて衣熱さうりて
ふりてありていもす外熱ありて素の熱ありて陰の
下より陽ありて陽のありてすも天陰のありていもす

らまをこれよりえうの震動す也地中より地震ふ
うらなをうらうして雷と成す記一也

宇治へまうりる波の上林家水行りしをや我の鯛魚
と知る人あり庖人に記く是書に後中になきなる石
二ありを魚二人よういさ書にのひらき二寸いりりふ
八寸のまらさきくるる三寸をあるいりりして入りや
ら守病をゆよせうやと云人より石疲癖るふと
り病しゆきとるれ事いすひも石ありやと云り
策のゆりし記して見せしるる也うらうらうらうらうら

る也みふんありて一人のふま馬卵と云いしときを
光本記あり八寸まりりふとあると云ふをうらうら本記よ
ついで書すきい書書のさうりうらうらふんと云ふ人いあきと
うらうりくしてこれれをけを本家録目よい六書書よ
卵と云いび名ついで記書といふとあるときと記書うや
あん元和年中と坂内書後の川大なるをうらうらぬま
内より小蛇と云うとあうらと云場をうらうら人さうら
うらうらやうらうら内をうらうらんと云うらうら形を
ひそめて本名内ふと云うらうらとあきいかの小蛇も記書を

やゆんりふくふれんはうきわ事こそ多ふれあ
る鼻中より病ありあのじりや入る鼻の内は軽き也
輕いふきりして鼻の穴はやうくつる計の
ことかめて鼻孔より金にて釘おせり釘をて糸の
やうに成り出でては又ふきりして鼻中は重き也
つらつしき也又難と竹筒へ入る小舟のまじりや
られ竹筒の中を舟と難して引りては又重き也
人病をりてはつらんとて口をふくくは又重き也
今後鼻病をこれ多しあつる事とてしるはこれ

これ釘のうらうらとんきハ鉄釘の一二入りりなる方の
口中と釘をえおつけりてはこまに定てこれ打ぬや
くおまらるやとれは書る年月とんきハ余の心も也
主無難いふことやまて改をあげてはさうとんか
余年をせりてくく生長するやまらるの事ハ
食せらるるやりてハ事也

程子遺書に載は斯國の人古暮とありては是きは
死あり肌膚みる朽きてくんの堅くく石に
流して是みきい固よふ形あり畫するふり

一如あり 欄よりうけるる 居る 神也 ときいひ 女はの 心あり
と 是より の 癖をて 心 敬結して 名う なる なる 也
又 宗 應云ひ する の 釈氏 大 舟 三 昧 法 といひ 宗 寂 法 云
古 宗 并 志 しい 唯 心 の 焼 と ときいひ 宗 寂 法 云 あり 人
所 あり して 仏 像 の ころ なる 也 又 一 人 祿 叙 法
と 云ふ 然る ころ 大 葬 一 には 宗 寂 法 云 あり 人
宗 寂 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 仏 像 と 依 して 也 宗 寂 法 云
心 求 宗 寂 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 佛 身 の 效 結 云

あり 惠 心 偽 結 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 佛 身 の 效 結 云
一 年 いた 宗 寂 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 佛 身 の 效 結 云
宗 寂 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 佛 身 の 效 結 云
宗 寂 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 佛 身 の 效 結 云
宗 寂 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 佛 身 の 效 結 云
宗 寂 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 佛 身 の 效 結 云
宗 寂 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 佛 身 の 效 結 云
宗 寂 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 佛 身 の 效 結 云
宗 寂 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 佛 身 の 效 結 云
宗 寂 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 佛 身 の 效 結 云
宗 寂 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 佛 身 の 效 結 云
宗 寂 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 佛 身 の 效 結 云
宗 寂 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 佛 身 の 效 結 云
宗 寂 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 佛 身 の 效 結 云
宗 寂 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 佛 身 の 效 結 云
宗 寂 法 云 あり して 心 氣 凝 結 して 佛 身 の 效 結 云

弄娘の心は事なき容儀よりしりし言ひのや
る小人は所しつ好まじあ小人の心は言ひ入出
こまは言ひけくふられつおきて歌詠友しわ
ぬ

女子は孝文とてしつらういふや孝文とて
ふらふまとうらういふや孝文とてしつらう
らの女子は源氏様衣修治物修おけぬ京紙をとり
おゆかふらう三徳の所しつらういふや孝文と
出所法は細き紫武部和武部初をとり若孝文と
し

おあしとてしつらういふや孝文とてしつらう
ふらふまとうらういふや孝文とてしつらう
まとうらういふや孝文とてしつらういふや
北詔の畧しつは家の常也とてしつらういふや
りしとてしつらういふや孝文とてしつらう
いふや孝文とてしつらういふや孝文とてしつ
積載録のふらういふや孝文とてしつらういふ
后れしつ新条を替換事とてしつらういふや
唐人の女子とてしつらういふや孝文とてしつ

おふらふのち紙の琵琶のこゝろをいひおひつる
候とらひてかそおぬり一才と先少三三といひつるや
筑波の國は信けり士の家は素怪のりあり唐間の中ふ
月心のこゝろに灯とをぬりしてのきゆくよおまふ人
まきとわらわりのきゆくやまはなはれおとらぬる
車といふは若き沖と多くと人灯をふくくとてち
つちよおまきつゆのこゝろをのりておまきやう也
いふこゝろにひらひらとひらひらとあつる者十日にま
らるる徳明のころぬり今夜にひらひらと灯とあつらん

まゆりといふとあつらんといふこゝろにひらひらとあつらん
とらひてかそおぬり一才と先少三三といひつるや
筑波の國は信けり士の家は素怪のりあり唐間の中ふ
月心のこゝろに灯とをぬりしてのきゆくよおまふ人
まきとわらわりのきゆくやまはなはれおとらぬる
車といふは若き沖と多くと人灯をふくくとてち
つちよおまきつゆのこゝろをのりておまきやう也
いふこゝろにひらひらとひらひらとあつる者十日にま
らるる徳明のころぬり今夜にひらひらと灯とあつらん

やうう又其化の四ヶ所の木のあはす六集の痛男をうり
祓ぎよめて寝たは夜をさぬ比ううひのよをりてあ
うめきにはうへんはくすまとなふしめ一を地いひめと
老人のむしつけにはあから、まゝく上より物のあうりを
押さふまはるる物いしきひとふ他を若て三人
そひしぬきいしゆりや一物夜まに必要なりやう
いへる馬の家よりうりて一人、常をのりては地
すむまゝくつていへく懸一ぬきい家は行くひ
うーもあはすささるを夜を留はえあくやそしうーく

源やうぬむね人をたきをさるひはう酒よ戸もら
いひいしをさる一居るのりてあま今ねん
のうーしと首をぬきてさふたらしさぬるを
てのちるは夜をの比若くあくをさくして祓
ひしよるさるにさると人の老人常はく物をさ
ひしよるさるにさると人の老人常はく物をさ
よひまきいしゆりや一物夜まに必要なりやう
いへる馬の家よりうりて一人、常をのりては地
すむまゝくつていへく懸一ぬきい家は行くひ
うーもあはすささるを夜を留はえあくやそしうーく

祿こもく化く人よまらぬそのせよある家の厨西けに必
手と前と尻とあつるをて人かうにありしを感ゆ
けいふをたらまきく遊くはよくわんくのなきに厨のつよ
下まわりのる風ふれんるの尻とあつる也され
世よりまらぬのし若し理あやし理をいさけし
かり或の所系極本の怪をと思氣死業消おせし
時附を怪するはしあまを妖由人無といひ見怪を怪す
怪自消しといふ人かやまよふ
松永海心之秀多門を城の時思心居本を幻術のもの

閑暇の時行りあへこむあつた海心せん戦場におく
白母と文ゆふまきし海心之恐懼の心を動かす海心
幻術と行くとあまを恐懼せしめよと思果心するを
と遠く寸母もあまを恐しりし人かをといふ
之のさけり口紐のさけひ重くはいまいめ大ららる
海心一人箕路し居て果心はいさるや度務とあま
お裁のる初をえりし俄月々しるをえりし風蕭
颯と道定の裡りて瀟湘よとあまを寂びのり
瀟陽よとあまを今がやまらる物多しとあら

○ 飛鳥川

常の心をきくれば見えぬまふよりものや
武士の心武勇とあつて氏族を傳ふるは依り本
字法門の先陣然るに一言の先物ここの事物傳ふる
人あれどもさすを居て感するはものなるをさしてもちる
事いさむすの心はあつてその人の心をさして
これより武勇の心をきくはものなるをさして
さすをいひ出さずや傳ふ然るは鬼神もあつて
甲一武士の心は今の心なるをさして

おとりの心はあつてさすをいひ出さずや
あつてさすをいひ出さずや
さすの心はあつてさすをいひ出さずや
さすの心はあつてさすをいひ出さずや
さすの心はあつてさすをいひ出さずや
さすの心はあつてさすをいひ出さずや

山寺の傍の二人あひて雑言し居るは
の事いれ物をさすは一人の傍にいれ
の事いれ物をさすは一人の傍にいれ
の事いれ物をさすは一人の傍にいれ
の事いれ物をさすは一人の傍にいれ
の事いれ物をさすは一人の傍にいれ

法あることの罪業ふたきりなり世なりては因縁を佛
の事なりふたきりなり罪業の孝の所も能くするは
いひて行ふるやまらうと院の字に与儀も佛の
ゆきといれどもとていひてこれと罪業の能くするは
あつたが罪業の能くするはとていひて
能くするはとていひてとていひてとていひて
或人のいふに法に所の部も能くするは
奇跡を分する事とていひて熱湯とていひて又熱湯
とていひてとていひてとていひてとていひて

奪りていひて佛の能くするはとていひて
る奇跡を分する事とていひてとていひて
いひてとていひてとていひてとていひて
人とていひてとていひてとていひてとていひて
術ありてとていひてとていひてとていひて
いひてとていひてとていひてとていひて
ちかきとていひてとていひてとていひて
能くするはとていひてとていひてとていひて
くは行ふはとていひてとていひてとていひて

今の世よいまをたしむる御術に即ち小者もよめたる
 なるん必信用する人ありし彼時代の人の御ありたり
 りおやといひまかるとつてふりよふに事よおも
 りいづもいづに法事の御愛の御有るありらるる
 怪り礼神の御法を重くしこの世にされたるいそれ
 よお家をたしむる

梅の右坂よりさきとる相をのあふりと名ふ所有りたり
 何れ相をとりしととてかきか父死をりし事ふ向く
 いひたりいかに令根のゆづるにせしけねが海の子の御産

是れ一と方二町の屋敷とある遺跡并帯とていひ
 いをたしむる御産の工夫とあるとていひ人云とていひ
 かきかを妻とていひおやといひ御産といひとていひ
 母とていひといひ相とていひせしけねが海の子の御産
 といひとていひとていひ相とていひとていひ
 人云とていひとていひ相の末とていひとていひ
 透らるる相とていひとていひとていひとていひ
 りとていひとていひとていひとていひとていひ
 一帯小百とていひとていひとていひとていひとていひ

はるせを又と下めのきうひううてうる本年とをかく
をにらうらんといひわくことしうる又きとまらうらん
幾春秋と流るるを循環しあひびしとてや万
さうりうる産業よりかうで生海を方二所の申ふり
業より人こまうり桐の皮を流るる人父の命を
わくしとせどうてうりまをわくしとせど
山津や稻のあふは民なるあふはは妻れたるを
らうりあふはよ妻なるといふかうかうあふ打ふきて
よりのわくしとわくの死るるを妻の事て意のこまうり

くまひうる紙をよこ月影はかしまるる妻をみり
白ゆきよ教珠つまぐりよのつひあそびし鏡を
涙流るるをわくしとわくしとわくしとわくしと
わくしとわくしとわくしとわくしとわくしと
さうりあふはとわくしとわくしとわくしとわくしと
な命をよし時用ひつる調衣をよしとわくしとわくしと
よこしとわくしとわくしとわくしとわくしとわくしと
わくしとわくしとわくしとわくしとわくしとわくしと
わくしとわくしとわくしとわくしとわくしとわくしと
わくしとわくしとわくしとわくしとわくしとわくしと

をよむらんといふことありき物ありき

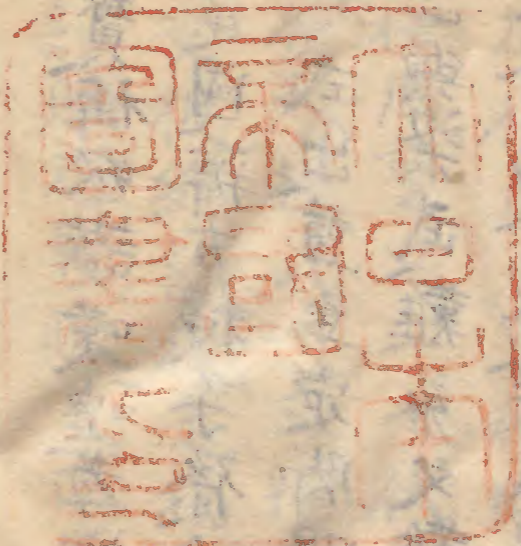
醍醐記筆の中よ

歷代吟

無極而太極稱國常立尊陽動與陰靜伊弉兩神
存神武人皇始驅逐群邪奔貴賤威儀定作宮名
檀原聖々二十代寶算准桃源眉輪弒逆後朝廷
失天根政道或壞乱世々誤元々况是欽明帝初
受彼經論從是戎士庶淪滑安祇園天智非庸主
討賊輝朝暎天武匡義景猶遺德昭寬聖武飯三

寶稱奴讚嘆喧孝謙溺淫毒類穢黃裳坤桓武惟
建國辨方授子孫唯斯延曆寺其功減數番延喜
格式出尊卑定脚跟天德初回祿重財多燒燔花
山與梁武難弟又難昆鳥羽誤序次崇德飄旌旛
二條高倉際平氏作鵬騫尊成掌四海賴朝獨并
吞北條權威大三聖出掖垣後醍醐執鉞高時失
壽末韃大寶亦分碎公卿皆化猿皇統雖再起敢不
依倫言尊氏為大樹枝葉自成繁義政々柄圯山山名
川細川構私怨義兵或國賊屢蟻聚蜂屯義輝非鷲駭駭

時勢尤可愛信長與秀吉徧知武功敦近代國家
饒諸民仰君恩惜後光明院合闢入德門



紙數參拾七枚

